大学図書館利用指導実態調査

－関西地区において－

丸　本　郁　子

Ikuko Marumoto:Research on User Educalion in Academic Libraries
－in Kansai District－

Ⅰ．　はじめに

図書館活動に限らず，全ての業務の改善を図るには，まず現状の正しい認識が第一歩である。大学および短期大学における図書館利用指導を語るにも，実態の正確な把握をせねばならない。しかしこの分野に関する過去に実施された各種の実態調査は，言葉の定義があいまいであったり，調査範囲が限られていた。責任ある団体が全国規模で全館種を網羅した調査をすることが期待される。[1)]本稿はそのような全国レベルの調査の予備調査として，関西地区の大学および短期大学において図書館利用指導の実態がどうであるかを本学図書館が1987年10月に行った調査の結果報告である。

Ⅱ．　過去に行われた調査

学校図書館界においては，図書館利用指導に関する全国調査は北嶋武彦らを中心として過去に何回か行われている。[2)]しかし大学図書館レベルの調査は先に述べたように限定された範囲をカバーしたものしかない。

文部省は毎年，全国の国・公・私立の全4年制大学に対し「大学図書館実態調査」を行っている。[3)]その一部，参考業務の内容別内訳の項目中「利用指導」という項目がある。この調査のデータは信頼度が高いのだが，残念ながら利用指導に関しては用語の定義が明確でない。ここで用いられている「利用指導」の語は解答者により解釈は異なると思われる。大部分はこれを個人対象のレファレンス回答としての利用ガイダンスと捉えているだろう。もしそうであるならば，文部省はその詳細な調査の一部に本調査の対象とする利用指導を含めてはいないことになる。

4年制大学を対象として，始めて本格的に図書館利用指導を正面に据えて行った調査は1977年に私立大学図書館協会・東地区部会研究部閲覧奉仕研究分科会が行った「大学図書館における新入生オリエンテーション及びガイダンスのあり方－全国大学図書館実態調査を中心にして－」がある。[4)]これは当時のオリエンテーションとガイダンスの実情のかなり正確な把握と分析をしたものであり，かつあるべき姿の展望を示した意欲的な労作である。調査対象は国・公・私立の各4年制大学図書館を中央館のみであるが網羅している。しかし短大に関しては，かなり進んでいる5館のみを対象としているだけであるので実情を正しく反映しているとはいえない。

私立大学図書館のみを対象とする調査は1986年5月に日本私立大学協会の大学図書館研修委員会が同協会加盟大学の本館及び分館を含むもの（回答数221館）を行った。[5)]これは図書館サービス全てに関する調査であるが一部に「新入生オリエンテーション」と「新入生以外のガイダンス」の項目がある。この調査は回収率90％という信頼性の高いデータを持ち，利用指導に関する箇所も，よくその実態がうかがわれる質の高い調査である。しかし対象が全国私立大学のうち201校のみを対象にしているという限界がある。

短大に対する調査は1977年に日本私立短期大学協会・図書館研究委員会が会員校を対象に調査している。[6)]同協会はその後も図書館担当者研修会を行う時に分科会の討議資料とするためにアンケート調査を行い，その結果を報告書中に公表している。この研修会資料中の調査は，その時々の傾向を知る助けとなるが回収率が低い点に問題がある。[7)]

同じく短大に対する調査は全国の公立・私立短大全体を対象としたものを日本図書館協会短期大学部会・短大図書館利用指導調査グループが1984年に実施した。[8)]これは回収率63％であり，かなり信頼のおけるデータを示しているが，国立短大が含まれていない。

以上概観して分かることは，文献に現れている限り大学・短大レベルの図書館利用指導に対する関心は私立大学また私立短大において高く，それらの団体が主としてその加盟館を対象に調査が行われてきた。国公私立全体を含む調査がなされなければならない。

Ⅲ．　本調査の目的および用語の定義

上述のごとく，本調査は将来全国規模で設置者の別なく国公私立の全大学および短大の図書館における利用指導の実態を調査するため，その予備調査

として関西地区の全ての国公私立大学及び短大図書館を対象として実施された。

利用指導という語は種々の形態で行われるものを含んでいる。この語が含む範囲は椎葉の図[9]が示すように，利用者一般対象の間接的指導－掲示，印刷物，ＡＶ資料－も含むし，個人やグループ対象の直接的指導もある。これらのうち間接的指導およびレファレンスでの個人対象の指導は，図書館の日常業務の一部として定着しつつある。また集団対象の直接的指導のうちオリエンテーションは，前説で紹介した各調査結果を見ると，おおむね90％以上の館が行っている。つまりオリエンテーションという形の利用指導も定着したと言える。しかしオリエンテーションのみでは利用者が図書館資料を使いこなせる域には達しないことも，前述の各調査が共通して指摘する点である。したがって今各大学および短期大学図書館が模索しているものは，それより進んだレベルの指導をどう行うかということである。このオリエンテーションより進んだ集団対象の指導は，大学により第二次オリエンテーションであるとか，文献探索ガイダンスなど種々の呼び方がされている。本文ではこの椎葉の図でも用いられ，日本私立大学協会や私立大学図書館協会などが用いている語「ガイダンス」をこれにあてる。

本調査は利用指導のうちガイダンス，および教員が学科目として行う利用指導に焦点を当て調査した。

表１　調査対象

表１　調査対象	調査対象大学数	全国大学数	比率　％
４年制大学総数	95	465	20.1
国立	14	95	14.7
公立	11	36	30.5
私立	70	334	20.9
短期大学総数　＊	73＋(13)	548	13.4
国立	1	37	2.7
公立	7	52	13.5
私立　＊	65＋(13)	459	14.2

＊短期大学数の（13）は４年制大学と図書館を共用するものである。

Ⅳ. 調査対象

関西地区にある4年制大学及び短期大学の全ての本館と奉仕対象者200名以上の分館を対象とした。これは全国の大学総数の20.1%（4年制大学）と15.7%（短大）に対する調査となる。4年制大学と短期大学共用の館の場合は4年制大学の方へ一括して処理をした。

Ⅴ. 調査時期および調査方法

調査期間：1986年10月15日－11月15日

別紙のアンケート用紙を用い，各大学および短大の図書館長あてに調査の依頼をした。回答用紙には館名，回答記入者名，および回答記入者の館内職名を記入することを求めた。アンケートの設問は4年制大学，短期大学共通のものであるが，基礎事項は事情に合わせて変更をした。

Ⅵ. 回答状況

表2　回答状況

	依頼館数	回答館数	回収率　%
4年制大学総数	147	137	93.1
国立	40	35	87.5
公立	19	18	94.7
私立	88	84	95.4
短期大学総数	75	69	92.0
国立	1	1	100
公立	9	9	100
私立	65	59	90.7

Ⅶ.　基礎事項の集計結果

表 3　大学の種別による館数

	国立	公立	私立	合　計
大学院併設大学	30	17	42	89
短大併設大学	0	0	13	13
4 年 制 大 学	5	1	29	35
4 大 学 合 計	35	18	84	137
短　期　大　学	1	9	59	69

表 4　学部数による館数：4 年制大学

	国立	公立	私立	合計
単 科 大 学	12	8	47	67
2～4学 部	9	2	22	33
5学部以上	14	8	15	37

表 5　学科数による館数：短期大学

	国立	公立	私立	合計
単 科 大 学	0	3	13	16
2～4学 部	0	5	41	46
5学部以上	1	1	5	7

表 6　学生数による館数：4年制大学

	実数	%
1000人 以 下	34	24.8
1001人～5000人	76	55.4
5001人～9999人	16	11.7
10,000人以上	11	8.0

表 7　学生数による館数：短期大学

	実数	%
500 人 以 下	25	36.2
501人～1000人	20	29.0
1001人～2000人	17	24.6
2,001人 以 上	7	10.1

表8　学部(学科)による館数

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
総　　合*	47	34.3	36	52.2
教　　養	5	3.7	0	0.0
人文科学系	17	12.4	6	8.7
社会科学系	14	10.2	1	1.5
自然科学	15	10.9	2	2.9
医学・薬学系	20	14.6	5	7.3
芸術・体育系	5	3.7	4	5.8
家　政　系	1	0.7	10	14.5
教　育　系	10	7.3	5	7.3
そ　の　他	3	2.2	0	0.0

* 短大の場合，系統の異なるものを2学科以上有するものは総合とした。

表9　奉仕対象学生による館数

	実数	%
院生	2	1.5
院生＋学部生	91	66.4
学部生	32	23.4
学部生＋短大生	12	8.8

表10　専任館員数による館数：4年制大学

	実数	%
5人以下	40	29.2
6～10人	43	31.4
11～20人	36	26.3
21人以上	17	12.4

表11　専任館員数による館数：短期大学

	実数	%
3人以上	52	75.4
4～6人	15	21.7
7人以上	2	2.9

Ⅷ.　回答内容および分析

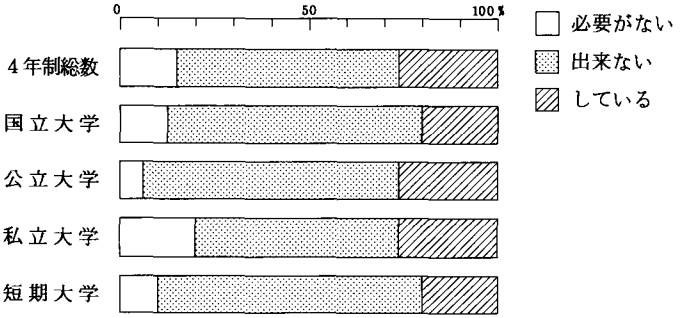
1.　ガイダンスの実施状況

この調査ではガイダンスを行っているかどうかと同時に，行っていない場合は「する必要がない」と考えているのか，それとも行うほうが良いと思ってはいるが，なんらかの障害のために行うことが「出来ない」のであるかを問うた。

表12　ガイダンス実施状況

	していない				している	
	必要がない		出来ない			
	実数	%	実数	%	実数	%
4年制総数	20	14.6	81	59.1	36	26.3
国　立	4	11.4	24	68.6	7	20.0
私　立	1	5.6	12	66.7	5	27.8
公　立	15	17.9	45	53.6	24	28.6
短大総数	6	8.7	49	71.0	14	20.3

ガイダンス実施状況



関西地区においてガイダンスの実施状況は4年制大学では26.3%，短大では20.3%である。私立大学での実施率（28.6%）を日本私立大学協会の1986年調査のデータの実施率(28.8%）と比較してみると，ほぼ一致をする。その意味でこの関西地区のデータでもって全国の状況を類推することは妥当で

あると思う。この実施率（26.3%）を1977年の私立大学図書館協会調査の実施率(18.8%）と比較してみると，この10年間にその歩みは,コンピュータの普及率には及びはつかないが，かなり進展を示していると言える。

より大切なことはガイダンスを実施していない館も，それはガイダンスを必要でないと考えているのではなく，する必要はあるが現在は出来ていないと捉えている点である。今やガイダンスの必要性をキャンペーンする時代ではなく，いかにしてそれを可能にするかを考える時に移っている。

2．実施に影響を与える要素

設置者によって差があるか（表13）

4年制大学においては国立大学の実施率は20%であり,公立(27.8%）と私立(28.6%）に比べて一見少ないようではあるが,実際は中央館が一括して行う例もあり,必ずしも実施されていない訳でもない。したがってこの調査で見る限り,4年制大学においてガイダンスは設置者の種別によって実施率に有意の差は認められない。

表13　ガイダンスを行っているか：設置者別

	4年制大学				短期大学			
	していない		している		していない		している	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
総数	101	73.7	36	26.3	55	79.7	14	20.3
国立	28	80.0	7	20.0	1	100	0	0.0
公立	13	72.2	5	27.8	7	77.8	2	22.2
私立	60	71.4	24	28.6	47	79.7	12	20.3

学生数との関連（表15,表16）

学生数が少ないほどガイダンスは行いやすく実施率が高いのではないかとの仮説を持っていたが，調査結果では必ずしもそうではない。4年制大学，短大共に中規模館の方が実施率が高い。これで見るとガイダンスの実施は学生数よりむしろ館の体制に関連がありそうだ。

表14　ガイダンスをおこなっているか：学部数別

	4年制大学				短期大学			
	していない		している		していない		している	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
単　科	55	82.1	12	17.9	12	75.0	4	25.0
2～4科	20	60.6	13	39.4	37	80.3	9	19.6
総　合	26	70.3	11	29.7	6	85.7	1	14.3

表15　ガイダンスをおこなっているか：学生数別

	4年制大学			
	していない		している	
	実数	%	実数	%
1000人以下	26	76.5	8	23.5
1001～5000人	58	76.3	18	23.7
5001～9999人	9	56.3	7	43.7
10,000人以上	8	72.7	3	27.3

表16　ガイダンスをおこなっているか：学生数別

	短期大学			
	していない		している	
	実数	%	実数	%
500人以下	23	92.0	2	8.0
501～1000人	13	65.0	7	35.0
1001～2000人	13	76.5	4	23.5
2,000人以上	6	85.7	1	14.3

専任館員数との関連(表17,表18)

専任館員数と実施率との相関を表17と表18で見ると,ガイダンス実施率は館員数の少ない館より多い館のほうが高く,やはり実施率は学生数よりも館の体制のほうに相関があることがはっきりと出ている。

奉仕対象学部(学科)との関連(表19,表20)

4年制大学の実施館は実数としては総合大学が多い。これは実施の有無が専門分野と関連があると言うより,むしろ先に検討したように館の規模との関連が強く,館員数の多い館での実施率が高いと見るほうがよさそうである。目立つのは社会科学系の実施率の高さ(50%)である。これは近年指導対象となる文献探索ツールが整備されてきたことに関連があると思える。利用指

導の伝統がある医学・薬学系においては，実施館数は他館種と比較すると多いが，全体の¼の館のみしか実施していないのは意外であった。医学系の館員の意見では国家試験の受験対策が重視され，従来行われていた指導が取り止められたケースもある状況だそうだ。人文科学系および教育系の実施率は低い。しかしこれも表23,表24で分かるように,必要がないのではなく,指導の必要は認めながらも実施出来ないからである。短大に関してはデータ総数が少ないので(表20),これでもって確かなことは言えない。

表17　ガイダンスをおこなっているか：専任館員数別

	4年制大学			
	していない		している	
	実数	%	実数	%
5人以下	35	87.5	5	12.5
6～10人	30	69.8	13	30.2
11～20人	24	66.7	12	33.3
21人以上	12	70.6	5	29.4

表18　ガイダンスをおこなっているか：専任館員別

	短期大学			
	していない		している	
	実数	%	実数	%
3人以下	44	84.6	8	15.4
4～6人	10	66.7	5	33.3
7人以上	1	50.0	1	50.0

表19　ガイダンスを行っているか

4年制大学	していない		している	
	実数	%	実数	%
総合	32	68.1	15	31.9
教養	3	60.0	2	40.0
人文科学系	15	88.2	2	11.8
社会科学系	7	50.0	7	50.0
自然科学	13	86.7	2	13.3
医学・薬学系	15	75.0	5	25.0
芸術・体育系	4	80.0	1	20.0
家政系	1	100.	0	0.0
教育系	8	80.0	2	20.0
その他	3	100.	0	0.0

表20　ガイダンスを行っているか

短期大学	していない		している	
	実数	%	実数	%
総合	31	86.1	5	13.9
教養	0	0.0	0	0.0
人文科学系	4	66.7	2	33.3
社会科学系	1	100.	0	0.0
自然科学	2	100.	0	0.0
医学・薬学系	4	80.0	1	20.0
芸術・体育系	3	75.0	1	25.0
家政系	6	60.0	4	40.0
教育系	4	80.0	1	20.0
その他	0	0.0	0	0.0

表21　ガイダンスをしていない理由：設置者別

	4年制大学				短期大学			
	必要がない		出来ない		必要がない		出来ない	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
総　数	20	19.8	81	80.2	6	10.9	49	89.1
国　立	4	14.3	24	85.7	0	0.0	3	100.
公　立	1	7.7	12	92.3	2	40.0	3	60.0
私　立	15	25.0	45	75.0	4	8.5	43	91.5

表22　ガイダンスをしていない理由：学生別

	必要がない		出来ない	
	実数	%	実数	%
院　生	1	50.0	1	50.0
院　生＋学部生	12	18.4	53	81.5
学部生	5	23.8	16	76.2
学部生＋短大生	2	18.2	9	81.8
短大生	7	12.5	49	87.5

表23　ガイダンスをしていない理由：4年制大学

	必要がない		出来ない	
	実数	%	実数	%
総　合	5	16.1	26	83.9
教　養	2	66.7	1	33.3
人文科学系	1	6.7	14	93.3
社会科学系	2	25.0	6	75.0
自然科学	3	25.0	9	75.0
医学・薬学系	3	20.0	12	80.0
芸術・体育系	0	0.0	4	100.
家政系	1	100.	0	0.0
教育系	1	12.5	7	87.5
その他	2	66.7	1	33.3

表24　ガイダンスをしていない理由：短期大学

	必要がない		出来ない	
	実数	%	実数	%
総　合	1	3.4	28	96.6
教　養	0	0.0	0	0.0
人文科学系	0	0.0	4	100.
社会科学系	0	0.0	1	100.
自然科学	0	0.0	2	100.
医学・薬学系	2	50.0	2	50.0
芸術・体育系	1	33.3	2	66.7
家政系	2	33.3	4	66.7
教育系	0	0.0	4	100.
その他	0	0.0	0	0.0

表25　ガイダンスの必要がない理由：4年制大学

順位	理　由	実数
1	レファレンスで対応	13
2	館内サイン等で充分	7
3	教員がしている	6
4	学生には知識がある	5
5	その他	3
6	教科がある	0

必要としない理由(表25,表26)

ガイダンスをする必要が無いと答えた館の理由を表25,表26に多い順に列挙した。第一位はレファレンスでの対応で十分とするものである。2位は館内サインで十分というものである。4年制大学では各教科の教員が指導をするので図書館員の指導は不必要とするものが多い。新入生オリエンテーションで丁寧にするので不必要という認識の所もある。

表26　ガイダンスの必要がない理由：短期大学

順位	理　　由	実数
1	レファレンスで対応	4
2	館内サイン等で充分	3
3	その他	2
4	教科がある	0
5	教員がしている	0
6	学生には知識がある	0*

表27　必要を感じながらしていない理由

順位	4年制大学　理 由	実数
1	図書館員の人手不足	53
2	要求がない	24
3	その他	20
4	資料知識が不足	18
5	教授法の知識が不足	17
6	学生数が多すぎる	15
7	学生が忙しすぎる	12
8	教員の無理解・反対	2
9	自館内の意見不一致	1

表28　必要を感じながらしていない理由

順位	短期大学　理 由	実数
1	図書館員の人手不足	35
2	要求がない	16
3	学生が忙しすぎる	13
4	教授法の知識が不足	12
5	資料知識が不足	10
6	その他	7
7	学生数が多すぎる	5
8	教員の無理解・反対	5
9	自館内の意見不一致	0

実施を阻む理由（表27,表28）

必要を感じながら出来ていない理由を多い順に並べたのが表27,表28である。圧倒的に多い理由が人手不足である。これは先に見た専任館員数と実施率との相関データの結果とも一致している。次に多いのは要求がないという理由である。授業形態が図書館資料を用いる事をあまり必要としないので学生たちから利用指導の要求がないとよく言われているが,そのように館員がとらえていることが分かる。3番目の理由は短期大学においては学生が忙しすぎる点があげられている。現行のカリキュラムでは確かにそうであろう。4年制大学ではその他が3位であるが，その内訳は現在指導することを検討中または準備中，図書館の移転，担当者の人事移動，従来行われていたが中止，などがあげられている。小さな分館や短大図書館の中には資料の不足を理由に挙げ，基本的図書や講義に直結した資料の収集が先決という所もある。

館員の力量不足（資料知識と教授能力に関して）という理由は4年制，短大共にそれほど大きな障害と考えられていない。それよりも体制整備と利用者からの要求がないことが最大の理由と意識されている。

意外であったのは図書館員が指導することに対し教員の反対があったり，館内で指導することに対し同意を得にくいなどが実施の妨げとなっているのではないかとの仮説を持っていたのであるが，それらは最下位であった。ただ短大図書館においては教員の反対が5館であげられていることからも，これが一つの要素であることが分かる。短大図書館員への教員の期待度・評価の反映の一面を示す数値と思える。

3．ガイダンスの形態

表29　ガイダンスの形態:対象

	4年制大学	
	実数	%
1,2年生	15	41.7
3,4年生	22	61.1
院　生	9	25.0
各レベルで	0	0.0
その他	6	16.7

表30　ガイダンスの形態:対象

	短期大学	
	実数	%
1年生	4	26.7
2年生	2	13.3
1.2年生両方に	7	46.7
その他	2	13.3

表31　ガイダンスの形態:方法

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
学年・学科全員に	5	13.9	0	0.0
クラス・ゼミ単位	6	16.7	5	33.3
希望のクラスに	19	52.8	3	20.0
希望者に	10	27.8	6	40.0
その他	7	19.4	1	6.7

指導対象と方法（表29,表30,表31）

4年制大学では下級生(1，2年生）より上級生（3，4年生）に対する指導が多い。情報ニードの出てきた者への指導なのであろう。短大では下級生への指導のほうが多い。その他に含まれる指導対象としては，教員・研修生・外国人留学生に対するものが挙げられている。

ガイダンスと授業との結びつきも4年制大学においては，はっきりと認められ，一番多くとられている方法は教員から希望を募り，要望のあるクラスやゼミに対して指導を行う形である。それに比べ短大では教員からの要望での指導は少なく，クラス単位で全員が指導を受けるか，図書館主催の希望者に対する形が多い。これは前項でも見られた教員の図書館員に対する信頼感・期待度とも関連がありそうである。

ガイダンス実施館の¼ほどは学年・学科またクラス単位で全員に行うようになっており，ガイダンスが教務行事に定着していることが分かる。

表32　ガイダンスを開始して何年目か

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
3年以内	9	25.0	10	66.7
4～9年	21	58.3	3	20.0
10年以上	6	16.7	1	6.7

表33　10年以上行っているところの対象学部(学科)

	4年制大学	
	実数	順位
医学・薬学系	3	1
総合	2	2
自然科学	1	3

表34　10年以上行っているところの対象学部(学科)

	短期大学	
	実数	順位
芸術・体育系	1	1

表35　何%にいきわたっているか

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
10%以内	19	52.8	5	33.3
11～30%	7	19.4	4	26.7
31～50%	3	8.3	0	0.0
51～99%	3	8.3	1	6.7
100%	0	0.0	3	20.0

表36　何%にいきわたっているかの分析51%～99%および100%を選んだものの学部

	4年制大学	短期大学
	(実数)	(実数)
総合	1	0
人文科学系	1	1
教育系	1	0
家政系	0	3

4　ガイダンスの普及度（表32,33,34,35,36）

4年制大学ではガイダンスの歴史が10年を越えるものが6館(17%）を占め，4年以上経過している所が実施館の75%である。最近3年以内に始めた所も9館あり，まだこれからも増加していくことが予想される。10年以上実施している館は医学・薬学系が多い。短大では3年以内に開始した所が大半でガイダンスの歴史は始まったばかりである。

昨年度(1986年)に限り1年間に何%の学生に指導が出来ているかを見ると，10%以内というものが大方である。短大はスケールが小さなせいか100%という館も3館あった。

5　ガイダンスの内容（表37,38,39）

指導内容を次のように分けて，そのどの部分をカバーしているかをたずねた。

初歩的ガイダンス：分類やカード目録の使い方，図書館資料のタイプ
一般的文献検索法：一般的参考図書や「雑誌記事索引」の用法
主題別文献検索法：専攻分野やテーマに合わせたもの
自館のコンピュータ目録の用法
オンライン検索法

表37　内容

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
初歩的ガイダンス	28	77.8	12	80.0
一般的文献検索法	21	58.3	7	46.7
主題別文献検索法	18	50.0	6	40.0
コンピュータ目録	4	11.1	0	0.0
オンライン検索法	7	19.4	0	0.0
その他	1	2.8	1	6.7

表38　主題別と答えたものの対象学部(学科)

順位	4年制大学	実数
1	総合	7
2	社会科学系	5
3	医学薬学系	3
4	人文科系	1
5	自然科学系	1
6	教養学部	1

表39　主題別と答えたものの対象学部(学科)

順位	短期大学	実数
1	総合	3
2	家政系	2
3	人文科系	1

4年制大学も短大も区別なく，ほとんど（8割）が初歩的ガイダンスからの指導を行っている。主題別検索の指導以前に一般的検索法の指導も必要でありこの二つの指導もほぼ対になって行われている。このあたりの数値は学校図書館レベルの利用指導の不備を大学図書館が補っている点をはっきりと示している。

主題別文献検索法の例としては次のものが挙げられていた。学問分野別，商・経済学部のプロゼミ，経済経営文献セミナー（連続講座），医学文献検索法，*Index Medicus*，医学中央雑誌，判例検索法，*Chemical Abstract*，*Biological Abstract*，SCIの使い方，卒論作成のための文献調査法，生活科学演習ゼミ，女子教育史，京都の芸術，京都の文化財，研究者に文献調査の体験を語ってもらう。

コンピュータ目録のガイダンスは4館，オンライン検索の指導は7館が行っている。例としてはDIALOG（3件），BRS，MEDLINE（2件）JOISなどである。

6　教材（表40）

表40　用いる教材

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
ビデオ	0	0.0	1	6.7
スライド	4	11.1	0	0.0
OHP	0	0.0	2	13.3
図書館案内	19	52.8	7	46.7
プリント	17	47.2	9	60.0
テキストブック	9	25.0	2	13.3
練習問題	9	25.0	3	20.0
館内ツアー	15	41.7	4	26.7

ガイダンスの補助教材として多く用いられているものは図書館案内とそのクラスの為に作成されたプリント教材である。4年制大学ではテキストブックを用いている館もあるが，その殆どは自館作成である。オンライン検索の指導に業者作成のテキストを用いている所もある。4年制大学では館内ツアーを同時に行う方法が良くとられている。オリエンテーション用のビデオを作成している館は多いように聞いているが，ガイダンスレベルのビデオは計画

中の所はあるが使用している所はない。実習は重んじられ，練習問題をさせる所は25%である。授業担当教員に練習問題を作成してもらう所もある。

7　問題点・希望

問題点と希望を自由記入で書き出してもらった。まだ実施していない館からは，ガイダンスの必要性は痛切に感じているが準備の時間がとれないというもの，また館全体の改革―新館完成，事務の電算化等―に合わせて積極的にガイダンス実施を計画中などというものがあった。

実施中の館からは，実施ゼミ数の拡大や授業時間の延長等と量的充実を計る計画と，主題に合せて担当者の専門化を計るものや教科担当教員との打合わせを十分にするなどと質的充実を計る意見が出ている。

方法的にも新入生に対するもの，3・4年生に対するもの，院生へのもの，とプログラム化する計画をしている館もある。

主題別文献検索法のスライドの作成（2館）やビデオの作成（2館）を計画中の所もある。実習をさせる場合，資料数に限りがあるのをどうするかに問題を感じている館もある。

8　ガイダンスをすすめるために館員が必要とするもの（表41,42）

表41　利用指導をすすめるために必要なものは何か

4年制大学		
	実数	順位
資料研修会	60	1
マニュアル	58	2
テキストB	48	3
AV教材	41	4
会議・研修会	38	5
教授法研修会	34	6
図書館学コース	17	7
クリヤリングH	13	8
その他	9	9
雑誌記事にする	7	10

表42　利用指導をすすめるために必要なものは何か

短期大学		
	実数	順位
資料研修会	35	1
マニュアル	33	2
テキストB	31	3
AV教材	27	4
会議・研修会	26	5
教授法研修会	17	6
図書館学コース	15	7
クリヤリングH	11	8
その他	6	9
雑誌記事にする	4	10

現場の館員が今一番必要と感じているものは，資料知識を得る為の研修会である。この資料知識は現行の図書館員養成段階での指導が決して十分では

無い事と同時に，新しい二次資料の増加速度が増している現状を見ても，当然なニードと思える。各図書館団体，教育機関が組織的にインサービス・トレーニングのプログラムを組む事が望まれる。

次に館員が必要としているものは館内で行うための手引であるマニュアルと教材としてのテキストブックやＡＶ教材である。これ等は，良いサンプルがあれば，各館でその事情に合わせたものを作り出すことはさして難しいことでは無い。情報交換の場を作りだすことが必要である。それは研修会であったり会議であったりするが，それへの要求が次にきている。クリヤリングハウスというのはアメリカで作られているそのような情報交換の場であり，各図書館で作られた資料をプールしておき，必要な時に借り出せるセンターであるが，このようなものを日本でも地区別にまた国レベルで組織すれば，今ここで現場の館員達が必要としているものを供給出来ることになる。しかしそのイメージは分かっていないようでそれへの要求はあまり高くない。

これ以外に自由記入欄に指摘されていた利用指導をすすめるために大切な要素は次のようなものであった。

a．利用指導を重視した図書館組織の運営の確立：つまり事務分掌規程への明確な位置付け
b．系統的な取り組み
c．授業やゼミと図書館の結び付き
d．教科の中へ利用指導を組込む

9　ガイダンスをすすめるために一番必要な要素（表43,44）

表43利用指導をすすめるために一番大切な要素

4年制大学		
	実数	順位
館員の地位向上	37	1
体制整備	30	2
館員の意識変革	26	3
資料の充実	14	4
授業の変革	13	5
その他	2	6

表44利用指導をすすめるために一番大切な要素

短期大学		
	実数	順位
館員の地位向上	16	1
体制整備	16	1
館員の意識変革	11	3
資料の充実	10	4
授業の変革	9	5
その他	2	6

調査者は現時点でガイダンスを行うために一番必要なものは図書館員が「利用指導は大学図書館員が行うべき業務である」との意識を持つことであると考えていた。調査結果を見ると現場ではやはりまず「館員の地位向上」であるとか，人員や予算措置等の「体制整備」が先決という選び方をしている。これで見るとパイオニヤが使命感でことをなす時ではなく，やはり外的条件を整えることでしか普及は計れないことが分かる。短大では「授業の変革」や「資料の充実」が3位と4位に選ばれているが，卒業要件単位をこなすための詰め込み授業が行われている短大がかなりあることや，資料数に限界のある小規模の館の悩みが反映されている選択のように思える。

その他の欄に記入されていたものでは，教員の意識の改革を求めているものが多い。ある短大ではもし館員がガイダンスを始めれば「教員の反発は必至」という表現がなされていた。同時に「組織が小さな短大の場合，教員の理解さえあれば簡単に実現する」との指摘もされている。

10　教科目としての指導（表45,46,47,48）

表45　教科目となっているか

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
いる	8	5.8	5	7.1
いない	129	94.2	64	91.4

表46　科目の種類

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
一般教育科目	1	12.5	2	40.0
専門科目	4	50.0	0	0.0
司書課程の一部	3	37.5	3	60.0

表47　単位数

単位数	4大	短大
1	1	3
2	0	1
3	0	0
4	4	0
5以上	0	0

表48　担当者

	4年制大学		短期大学	
	実数	%	実数	%
図書館の教員	4	50.0	4	80.0
他分野の教員	0	0.0	1	20.0
図書館員	1	12.5	0	0.0
教員＋図書館員	3	37.5	0	0.0

教科として図書館利用指導が行われている所はまだ少ない。4年制大学6%,短大7%である。教科の種類も独立した一般教育科目や専門科目としているもの（研究調査法，文献情報，文献調査法）もあるが，他は司書課程の一部を一般学生に開放する形（図書館学，参考業務，学校図書館の利用指導）で行われているに過ぎない。担当者は図書館学の教員が主であるが，4年制大学の中に図書館員が担当する所が一箇所，教員と館員が協力して行う所が3館あるのは頼もしい。

Ⅷ. まとめ

本調査は関西地区の大学・短大のみに限った調査であり，全国総数の20%（4年制），16%（短大）に対するものであるが，そのデータ内容は全国の傾向を知るに足るものと考える。

図書館員によるガイダンス形式の利用指導は増加の傾向を示している。4年制大学では5，6年の歴史をもつものが26%の館で，短大では，2，3年以内に開始されたものであるが20%の館で実施されている。未実施館も意識としては行う必要をほとんどの館で認めている。ガイダンス実施館は専任館員数の多い，つまり館全体の体制の整っている所が多い。指導内容は大学図書館レベルではあるが，ほとんどが初歩的指導から始めている。同時にコンピュータ目録やオンライン検索への指導が開始されている。指導は4年制大学では教科との結び付きが明確で，教員からの要請によりゼミやクラスに館員が出掛けて行く形をとるものが多いが，短大では図書館主導の自由参加形式のものが多い。

利用指導の実施を阻む最大の理由として館員の人手不足が挙げられているように，これからより指導を推進するためには各図書館の運営形態を利用指導を行える組織作りに変えていくことが必要である。今図書館運営を取り巻く環境はコンピュータ導入で大きく変わりつつある。伝統的に図書館業務の中心を占めてきた整理業務が簡略化されつつあるこの時に，新たに利用指導を図書館員が当然行わねばならない業務の一つとして正式に位置付け，予算と人員配当を得られるようにしていかねばならない。管理職にあるもののリーダーシップが要求される。

利用指導実施に際し，現場の館員は資料知識や教授法の知識ーテキスト，ＡＶ教材作成，マニュアルも含めてーを必要としている。図書館団体や教育機関の対応が必要である。医学図書館協会が行っているようなグレード別の

館員教育の場を設定しても良いだろう。

利用指導が大学教育の一環として行われねばならないものである以上，教員の意識の変革と教員との協力体制の重要性も指摘されている。これは個々の館での取り組みと共に，図書館職全体の総意として教育界に働きかける必要がある。

このように見てくると，大学図書館にとって大事なサービスであるとの共通認識がすすんではいるけれど，現実の実施率は高くない利用指導をこれから推進するためには，全国レベルの組織化された対応をする時だと考える。筆者が提案しているごとく[10]，図書館関係団体のなかに利用教育の専門委員会を設置することが望ましい。この会が中心となり現在までに成された実践や研究を集大成し，利用教育の理論構築をなし，指導内容の体系化や体制作りのガイドラインを作成する時だ。またこの会は館員の求めている事柄をくみあげ，それを必要な場で提案していく必要がある。

本調査は図書館の立場から見た大学図書館における利用指導の現状の分析である。利用指導を真に大学教育の中に位置付けるためには，先に述べたごとく教員や大学当局との協力が不可欠だ。その意味でこれから行わねばならない調査の一つとして教員と大学の理事者が図書館利用教育に対し何を望み何を実践しているかの調査があるだろう。

謝　辞

この調査をまとめるには次の方々の御協力を頂きました。ここに深く感謝いたします。調査項目をまとめる際に助言を頂いた方：東京女子大学短大部図書館の椎葉敏子さん，慶応義塾大学三田情報センターの市古健次さん，亜細亜大学図書館の毛利和弘さん，国立音楽大学附属図書館の北島達雄・長谷川由美子さん。調査の実施方法について示唆を与えてくださった方：大学図書館研究会のメンバー。調査実施の機会を与えてくださった方：本学学長　関根秀和氏，本学図書館長　小宮山盛昭氏。集計プログラムを作成してくださった醍醐元正さん。調査実施の諸作業と統計処理を手伝ってくださった本学図書館の坂本恭子さんほか館員のみなさん。お忙しいなか時間を割きご回答を寄せてくださった関西地区の大学図書館および短期大学図書館の館員のみなさま。ありがとうございました。

注

1）これは日本図書館協会の調査委員会が「1987年度　日本の図書館調査」の付帯調査として実施することになった。

2）北嶋武彦・小山郁子　高等学校における学校図書館利用指導に関する実証的研究－全国実態調査を中心として「共立女子大学文芸部紀要」21：1－16，1975。北嶋武彦・小山郁子　小・中・高等学校における学校図書館利用指導の現状と課題「図書館界」27(6):186－194，206，1976。北嶋武彦ほか　学校教育における児童・生徒の情報処理能力の育成に関する研究「図書館界」192:138－143，1983。

3）文部省国際学術情報課「昭和60年度大学図書館実態調査結果報告」　1986等

4）私立大学図書館協会東地区部会研究部閲覧奉仕研究分科会　大学図書館における新入生オリエンテーション及びガイダンスのあり方－　「私立大学図書館協会会報」70:48－83，1978。

5）日本私立大学協会大学図書館研修委員会「日本私立大学協会　私立大学図書館における利用サービスに関する実態調査　集計結果」1986。

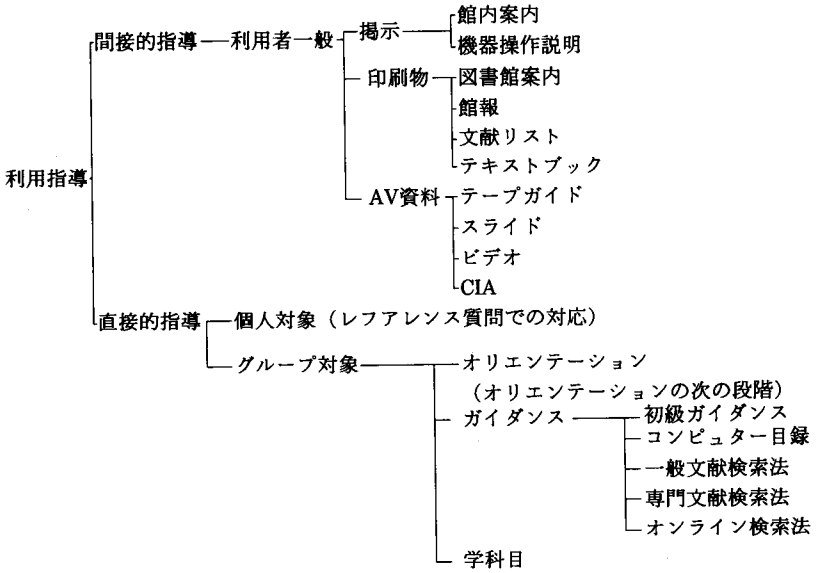
6）小山郁子　学生のための図書館教育について－実態調査の結果から「短期大学教育」35:103－109,1977。

7）1983年の回収率は35%。1986年の回収率は48%。短期大学における図書館利用教育　「昭和58年度私立短大図書館担当者研修会報告書」24：145－149,1983。「昭和61年度私立短大図書館担当者研修会資料集」27:117－123,1986。

8）短大図書館利用指導調査グループ　短大図書館の利用指導に対する調査報告「図書館雑誌」78(12):812－815,1984。

9）椎葉敏子　利用指導と実践報告　東京女子大学短期大学部図書館「第3回図書館利用指導ワークショップ報告書」日本図書館協会短期大学図書館部会p.87,1985。

図1　利用指導の形態



10）丸本郁子　日本の大学図書館における図書館利用教育「21世紀への大学図書館国際シンポジューム：利用論」京都外国語大学，1987。

(Received April 6,1987)

資料（アンケート用紙見本）

大学図書館利用指導実態調査

貴館名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

回答記入者名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿館内職名＿＿＿＿＿＿＿＿

基礎事項：該当する番号に○をつけてください。
右端の○印の中の数字は処理上のもので、調査事項とは関連がありません。

Ⅰ．大学の種別
1　大学院併設大学　2　短大併設大学　3　4年制大学　①

II．大学設置者の種別
1　国立　2　公立　3　私立　②

III．奉仕対象学部数による区分
1　単科大学　2　2－4学部　3　総合（5学部以上）　③

IV．奉仕対象学生数の規模
1　1000人以下　2　1001－5000人　3　5001－9999人　④
4　10,000人以上

V．奉仕対象学部
1　総合　2　教養　3　人文科学系　4　社会科学系　⑤
5　自然科学系（医・薬学を除く）　6　医学・薬学系
7　芸術・体育系　8　家政系　9　教育系　10　その他（

VI．奉仕対象学生
1　院生　2　院生＋学部生　3　学部生　4　学部生＋短大⑥

VII．奉仕館員数
1　5人以下　2　6－10人　3　11－20人　⑦
4　21人以上（人数をお書きください＿＿＿＿人）

設問：該当する番号に○をつけ、必要な箇所に御記入ください。

Ⅰa　貴館では入学時オリエンテーション以外に館員によるグループ対象の文献探索ガイダンス（利用指導）を行っていますか？
1　していない　－－－Ⅰbへ　⑧
2　している　－－－Ⅰcへ

Ⅰb　していない理由は？
1　する必要がない　－－－Ⅰb－1へ　⑨
2　する方が良いと思うがしていない　－－－Ⅰb－2へ

Ⅰb－1　なぜ必要がないのですか？（複数回答可）
1　学生には必要な知識がある　6　その他（　⑩
2　館内サインや印刷物で十分だ
3　個別のレファレンスで対応すれば良い
4　利用指導は教科として行っている
5　利用指導は各授業やゼミで教員がおこなっている
6　その他（

Ⅰb－2　必要を感じながらしていない理由はなにですか？（複数回答可）
1　学生数が多すぎる。　⑪
2　学生が忙しすぎて時間がない。
3　要求がない。
4　図書館員の人手不足
5　図書館員の力量不足－教授法に関して
6　図書館員の力量不足－資料知識に関して
7　自館内の意見不一致
8　教員の無理解、反対
9　その他（

Ⅰc　利用指導をしている所はその形態についてお答えください（複数回答可）　⑫⑬

Ⅰc－1　対象
1　1，2年生
2　3，4年生
3　院生
4　各レベルで
5　その他
（　　）

Ⅰc－2　方法
1　学年，学科を全員一度に
2　クラス，ゼミ単位で全員に
3　クラス，ゼミ単位で要望のあるものへ
4　図書館主催で希望者を募り
5　その他
（　　）

Ｉｃ－３　利用指導を開始して今年は何年目になりますか？
　１　３年以内　　２　４－９年　　３　10年以上　⑭
Ｉｃ－４　昨年度一年間に行った利用指導は全体で学生対象者の何％に当たりますか
　約 ＿＿＿＿＿＿ ％　⑮
Ｉｃ－５　内容
┌１　初歩的ガイダンス（分類，カード目録の用い方など）
│２　一般的文献検索法（一般的参考図書、「雑誌記事索引」などの用い方など⑯
│３　主題別文献検索法（ゼミ別・専攻別など．例をあげてください
│
│４　自館のコンピュータ目録の用い方
│５　オンライン検索法（何を？
└６　その他（
Ｉｃ－６　次の何を用いていますか？
┌１　ビデオ　（ａ　自館作成　　ｂ　既成品＿＿＿＿＿＿＿＿⑰
│２　スライド　（ａ　自館作成　　ｂ　既成品＿＿＿＿＿＿＿＿
│３　テキストブック（ａ　自館作成　ｂ　既成品＿＿＿＿＿＿＿＿
│４　自館の図書館案内　　┌５　プリント資料（臨時作成）
└５　練習問題　　└７　館内ツアー
Ｉｃ－７　そのほか特別な工夫をしているものがあれば書いてください．
⑱

Ｉｃ－９　問題点や今後の希望，計画がありましたら書いてください．
⑲

II　館員による利用指導をすすめるためにはどんなものが必要ですか？（複数回答可）
（Ｉｂ－１以外の方は全員お答えください）
┌１　情報交換の場－会議，研修会の開催　⑳
│２　利用指導の資料センター（クリヤリング・ハウス）の設置
│３　教え方に関する研修会
│４　資料に関する研修会
│５　指導者用マニュアル
│６　学生用テキスト
│７　スライド・テープやビデオ教材
│８　図書館学教育の中に「利用教育」のコースを設置
│９　雑誌類にもっと特集や記事として話題とする
└１０　その他（
III　利用指導をすすめるために一番大切な要素を一つ選ぶとすればどれですか？
┌１　人員・予算措置等の態勢整備　　┌４　図書館員の意識・意欲の変革　㉑
│２　図書館資料の充実　　└５　教員の授業法の変革
└３　図書館員の実力・地位の向上　　└６　その他（
IV　貴校では、教科目として利用指導がカリキュラムに組み込まれていますか？
┌１　いる－－－IV－ａおよびIV－ｂへ　㉒
└２　いない
IV－ａ　その科目の種類は何ですか？
┌１　一般教育科目　（科目名＿＿＿＿＿＿　＿＿単位　㉓
│２　専門科目　　（科目名＿＿＿＿＿＿　＿＿単位
└３　司書課程の一部（科目名＿＿＿＿＿＿　＿＿単位
IV－ｂ　担当者はだれですか？
┌１　図書館学の教員　㉔
│２　その他の分野の教員（どの分野ですか＿＿＿＿＿＿＿＿
│３　図書館員
└４　教員と図書館員との協力

御協力ありがとうございました．